

富山県小矢部市

桜町遺跡発掘調査報告書

— 小矢部市道の駅整備事業に伴う埋蔵文化財調査 —

2009年3月

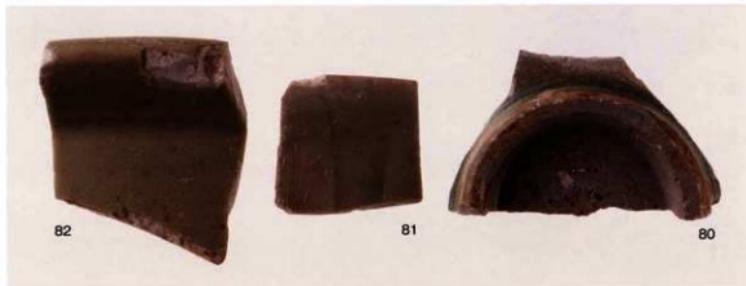
小矢部市教育委員会



桜町遺跡産田地区調査区遠景



SE01(井戸)



序

小矢部市は、清流小矢部川や緑深い山々に恵まれた、自然豊かな土地です。この恵み豊かな地には、富山が「越の国」と呼ばれるころに西の入り口として、人が行き交う道や町がつくられました。わたしたちの小矢部市は、このように交通の要衝として発展してきた町です。

桜町遺跡は、道さえも定かでなかったであろう縄文時代から越の国の入り口として発展する古代、そして中世、近世にかけての複合遺跡です。

現代では、桜町遺跡を核に、3つの自動車道が交差する「北陸の十字路」として人と文化が行き交う、交流と活力のまちを目指しております。

本書は、小矢部市道の駅整備事業に伴い、平成19年度に実施した桜町遺跡産田地区の発掘調査成果について報告するものです。この地区的調査では、奈良、平安時代の遺構が多く発見され、当時の人々の生活の一端が明らかとなりました。なかでも、現在は国道8号線小矢部バイパスが通過する隣接地の調査で発見された掘立柱建物が更に北側に広がる様子が現れました。

この発掘成果が、今後の研究の参考となり、埋蔵文化財に対する理解並びに保護の一助となれば幸いです。

終わりに、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご指導とご協力をいただきました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成21年3月

小矢部市教育委員会

教育長 西川 康夫

例　　言

1. 本書は、富山県小矢部市西中野に所在する桜町遺跡産田地区で実施した発掘調査の発掘調査報告書である。
2. この調査は、小矢部市道の駅整備事業に伴うもので、小矢部市教育委員会が小矢部市土地開発公社から委託を受けて実施した。
3. 調査年度、発掘面積、調査期間は次のとおりである。
・2007(平成19)年度　全面調査、7,630m²　平成19年4月10日～平成19年12月10日
4. 調査主体は小矢部市教育委員会である。発掘調査担当者は下記のとおりである。

総括	文化スポーツ課	課長	山口和夫
主務	同上	課長補佐	安念幹輪
事務	同上	主査	塙田一成
5. 本書の作成は、小矢部市教育委員会が行った。担当者は下記のとおりである。

総括	文化スポーツ課	課長	谷敷秀次
主務	同上	主任	中井真夕
事務	同上	主査	塙田一成
6. 本書の編集・執筆は、小矢部市教育委員会文化スポーツ課職員の協力を得て、平成19年度は安念幹輪が、平成20年度は中井真夕が行った。図版・挿図の作製は主に安念が行った。写真撮影は、遺構を安念が行い、遺物は木製品を田地写真館、土器はアーガス・フォト・スタジオ赤羽仁論が行った。
7. 本書の図・写真図版の表示は次のとおりである。
 - 1) 遺構番号は、調査現場で付した番号である。番号は遺構の種類に関わらず連番号とした。
 - 2) 遺構の略号は以下のとおりである。

SB	: 建物	SD	: 川・溝	SE	: 井戸	SK	: 土坑	P	: 柱穴
----	------	----	-------	----	------	----	------	---	------
 - 3) 本書で示す方位は全て磁北で、水平基準は海拔高である。
 - 4) 引用・参考文献は、著者と発行年(西暦)を〔 〕で文中に示し、巻末に一括して掲載した。
 - 5) 遺構図の縮尺は1/80とし、折込図は1/500、遺物図には1/2、1/3、1/5がある。
 - 6) 遺構および遺物の写真図版は全て任意である。
8. 出上遺物と調査に関する資料は、小矢部ふるさと歴史館で保管している。遺物の注記は、桜町遺跡を示す「SM」に出上地区名(産田S.M.)・出上地点等を併記した。また、本書に掲載した遺物は、図版毎にコンテナに入れ収蔵してある。
9. 発掘調査中および報告書作成中、関係者および関係機関から多人な御教示・御協力を得た。ここで謝意を表したい。

目 次

第Ⅰ章 位置と環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯	3
第Ⅲ章 遺構・遺物	5
第Ⅳ章まとめ	9
参考文献	10
抄録	

抄録

図版目次

巻首図版

巻首図版1 上: 桜町遺跡産田地区調査区遠景 (東南上空から)	卷首図版2 上: SE01(井戸)出土土師器 中: SE01(井戸)出土須恵器 下: 青磁
下: SE01(井戸) (南東から)	

図 版

第1図 遺跡位置図 (1: 25,000)	2
第2図 調査位置図 (1: 8,000)	4
第3図 SB 0 8 平面図 (1: 100)	11
第4図 SB 1 2 平面図 (1: 100)	11
第5図 SB 1 3 平面図 (1: 100)	11
第6図 SB 1 4 平面図 (1: 100)	11
第7図 SE 0 1 平面・断面図 (1: 80)	11
第8図 調査区遺構平面図 (1: 500)	11
第9図 上: SB 0 1、下: SB 0 2 平面図 (1: 80)	13
第10図 上: SB 0 3、下: SB 0 4 平面図 (1: 80)	14
第11図 上: SB 0 5、下: SB 0 7 平面図 (1: 80)	15
第12図 上: SB 0 9、中: SB 1 0、下: SB 1 1 平面図 (1: 80)	16
第13図 上: SB 1 5、下: SB 1 6 平面図 (1: 80)	17
第14図 上: SB 1 7、下: SB 1 8 平面図 (1: 80)	18
第15図 遺物実測図 須恵器	19
第16図 遺物実測図 須恵器	20
第17図 遺物実測図 須恵器	21
第18図 遺物実測図 須恵器、珠洲、青磁	22
第19図 SE 0 1 井戸桿板実測図	23

写真目次

図版1	調査区全体写真 (垂直)
図版2～図版4	遺構検出写真
図版5、図版6	出土遺物写真
図版7～図版9	SE 0 1 井戸桿板写真
図版10	堀立柱建物の柱穴から出土した木材

報告書抄録

ふりがな	さくらまちいせきはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	桜町遺跡発掘調査報告書						
副書名	小矢部市道の駅整備事業に伴う埋蔵文化財調査						
シリーズ名	小矢部市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第64冊						
編著者名	中井真夕						
編集機関	小矢部市教育委員会						
所在地	〒932-8611 富山県小矢部市本町1番1号						
発行年月日	西暦2009年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	(西暦)	m ²	
桜町	小矢部市 桜町・産田	16209	209021	36° 41' 22"	136° 52' 35"	20070410～ 20071210	7,630
	神別	上古時代		主な遺構	主な遺物	特記事項	
	散布地	古墳		なし	土師器		
所収遺跡名	散布地	奈良・平安	建物跡18、溝、井戸 土坑、柱穴	土師器・須恵器			
	生産地	中世		土師器・珠洲・唐津・ 越中漬			

第Ⅰ章 位置と環境

遺跡の位置

桜町遺跡は、富山県小矢部市桜町・西中野地内に所在する。小矢部市は、富山県の西端中央に位置し、石川県に隣接する。地形は、北・西・南の三方が丘陵性山地、東が平地、中央部が台地である。山地は、北部に市内最高所である稲葉山(標高347m)から宝達山に連なる丘陵地、西方に加越国境線をなす石動丘陵、南方には医王山の北側を占める蟹谷丘陵がある。東側には、庄川の堆積作用によって形成された砺波平野が広がる。砺波平野は、散居村の景観で知られている。中央の台地は、庄川と小矢部川が形成した河岸段丘である。小矢部川は、渋江川、子撫川などの各丘陵地から出る中小河川の流れを集めて、段丘と平地の境を蛇行しながら北流し、下流の高岡市伏木において富山湾へ注いでいる。

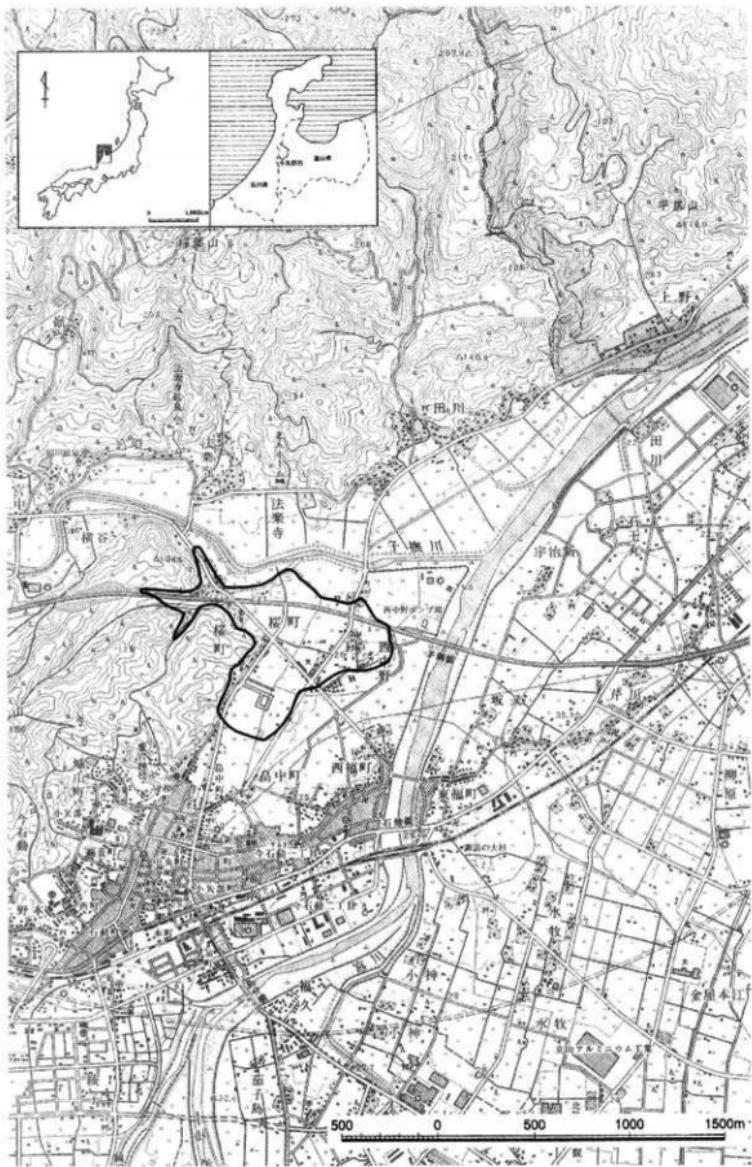
桜町遺跡は、小矢部川と子撫川の合流部から西、丘陵裾の河岸段丘上にあり、面積は、東西約1km南北800mの約60万m²推計されている。標高は、北側の丘陵下で約30m、小矢部川付近の北東部で約23mを測り、北西部から北東部へ傾斜している。遺跡の北側を画する子撫川は、現在の川底との比高差が約5m、その両岸には、比高差約4mの旧川底面がある。

産田地区は桜町遺跡の北部、子撫川の右岸に形成された自然堤防上に立地する。調査地の標高は、22.4～28.7mで、西側に向かい高くなる。

歴史的環境

桜町遺跡が位置する小矢部川左岸一帯は、地勢が比較的安定しており、旧石器時代から近代にまで及ぶ遺跡の密集地帯である。この密集地帯の北側に桜町遺跡は位置している。周辺には縄文時代の宮中遺跡、屋波牧遺跡など存在し、桜町遺跡舟岡地区の遺構との関連を伺わせる。弥生時代は、遺物はあるものの遺構に伴うものはない。古墳時代から古代では、舟岡地区の南側に延びる丘陵の先端部に7基の円墳と方墳からなる天狗山古墳群や、北側の丘陵斜面には横穴が11基確認された桜町横穴墓群が存在する。中世以降では南西の丘陵頂上・城山(標高186m)には前田利家によって築城された今石動城が存在する。

また産田地区を中心とした遺跡一帯には、土地の開発を契機に集落へと発展したことを示す条里地割が比較的良好に残っている。律令期には古代北陸道がこの地域を通過していたと考えられており、加賀の深見駅(石川県津幡町)から当地を通り、稲葉山の裾部を過ぎて伏木方面へ向かうものと考えられている。越中最初の駅「坂本駅」をこの地に比定する説もある。中世では「吾妻鏡」延喜元年(1239年)の条にみられる東福寺領「宮島保」に比定されている。



第1図 遺跡位置図(1:25,000)

第Ⅱ章 調査に至る経緯

事業計画(平成12年度～平成20年度)

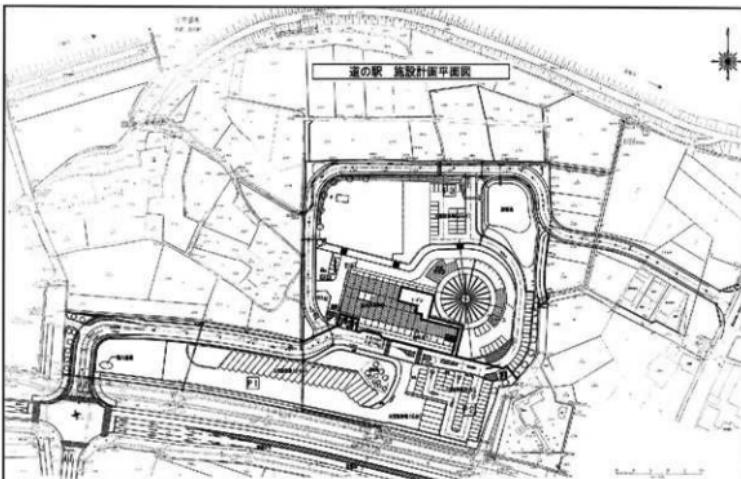
桜町遺跡周辺整備事業は、当初、桜町縄文遺跡の本格的な活用施設として縄文公園と一体的に展示・研究・体験できる施設を整備する目的で計画された。その後、事業計画は市の活性化のために道の駅と地域振興施設(交通情報・観光情報・飲食・物販・農産物販売)を整備することへと変更された。

調査の計画

当初の事業計画より桜町遺跡の近隣で用地を取得した結果、発掘調査の必要性が生じた。事業工程に影響が及ばないよう関係各課と協議し、平成17年度に試掘調査を、平成19・20年度に本調査・整理作業を実施した。

本調査位置

試掘調査結果から、構造物建設をはじめ駐車場や緑地帯などを描いた土地利用計画が具体化し、本調査位置を決定した。(※桜町遺跡周辺整備 土地利用計画平面図を参照)



遺跡の発見

桜町遺跡は、1971年(昭和46年)に富山県教育委員会が国庫補助を受けて実施した分布調査事業で発見された。西井龍儀氏が、桜町地内で土師器や須恵器が散布していることを発見し、「富山県遺跡地図」(1972年刊)に、桜町A遺跡と桜町B遺跡の2ヶ所が登載された。

詳細分布調査

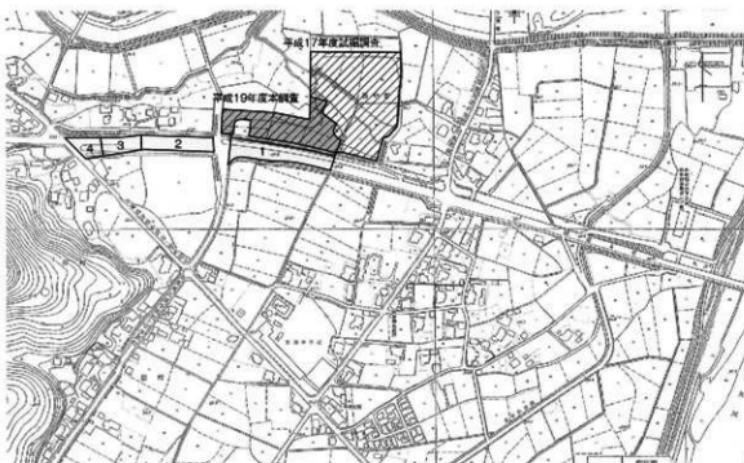
1979年(昭和54年)に国庫補助を受けて遺跡分布調査事業を実施した。調査は、富山大学人文学部考古学研究室、市文化財保護審査委員会、小矢部市教育委員会を中心に小矢部市埋蔵文化財

分布調査団を結成し行なった。その際桜町遺跡のある周辺一帯は、国道8号線小矢部バイパスの建設が予定されていたため、一番初めに調査に着手した。その結果桜町遺跡は、東西1.25m南北900mにも広がることが判明した〔小矢部市教委1980〕。

その後、1993年(平成5年)に『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』が作成された際、その地割りから、遺跡の範囲と重複して、また遺跡の東南へ張り出す形で桜町条里遺跡が設定された〔県教委1993〕。

産田地区および近隣地本調査歴一覧

No	調査年度	所在地	調査目的・調査面積	時代・特記事項
1	1984年 (昭和59年)	桜町字産田	国道8号小矢部バイパス建設に伴う本調査 発掘面積 7,000m ²	弥生中期・飛鳥・奈良・平安・中世・近世 飛鳥・奈良時代の建物群
2	1985年 (昭和60年)	桜町字産田	国道8号小矢部バイパス建設に伴う本調査 発掘面積 4,000m ²	弥生後期・弥生終末期・古墳・飛鳥・奈良・平安・中世・近世 和銅開墳
3	1986年 (昭和61年)	桜町字中出	国道8号小矢部バイパス建設に伴う本調査 発掘面積 2,000m ²	縄文・古墳・飛鳥・奈良・平安・中世・近世 中世末の建物
4	1987年 (昭和62年)	桜町字中出	国道8号小矢部バイパス建設に伴う本調査 発掘面積 3,500m ²	縄文・弥生・古墳・飛鳥・奈良・平安・中世・近世 木簡や「長岡神祝」などの墨書き 土器



第2図 調査位置図 (1:8,000)

第Ⅲ章 遺構・遺物

A 概要

今回の調査地は、遺跡の北端のほぼ中央部にあたる。地表面から深さ40～50cmのところで包含層であるⅢ層の上面にいたる。その上には、耕作土、Ⅰ層、Ⅱ層が堆積する。

検出した遺構は、奈良時代、平安時代の掘立柱建物18棟、井戸1基、土坑、溝、道路遺構等である。遺物は、須恵器、土師器、珠洲、青磁等が出土した。包含層から出土したものが大半で、なかでも七世紀後半から八世紀前半に帰属する須恵器が多く出土した。土師器は小破片であったため、復元や図化は困難であった。

B 遺構

掘立柱建物

S B 01 調査1区X69:Y86.5周辺。桁行き3間(4.5m)×梁行き2間(4.1m)の南北棟の総柱建物で、床面積は18.45m²、N-28°-Wである。柱間は、桁行きでは1.6mと1.3mと等間隔ではなく、また梁行きでは桁行きの柱間より広く2mを測る。柱穴は直径50cm前後の円形を呈する。その内柱痕を確認できた穴はP1、P4、P6、P7、P9及びP10、P5の底部からは底面の直径20cm、高さ30cmの円錐形を呈した柱材を検出した。柱穴の深さは一定ではないが側柱は約30～40cmを測るが、中柱のP11、P12は20cm前後と浅い。柱穴の覆土は褐灰色粘質土(10YR4/1)または灰褐色粘質土(10YR4/2)である。なお、S B 15と切り合うが新旧関係は確認できない。

S B 02 調査1区X69.5:Y86.8周辺。3間(5m)×1間以上(2m以上)のN-15°-Wの建物である。建物が調査区外に延びているため、その規模は確認できない。柱間は3間側で1.8m、1.5mと1.7mと等間隔ではなく、また1間側では2mを測る。柱穴P3、P4の底部からは底面の直径20cm、高さ30cmの円錐形を呈した柱材を検出した。また、柱穴P2、P3、P4では切り合う柱穴を検出した。これらの柱穴はS B 02の建て替えるものか、別棟のものかは遺構が調査区外に延びているため、確認はできない。直径50cm前後の円形である。柱穴の深さは一定ではないが側柱は約30～40cmを測る。柱穴の覆土は灰褐色粘質土(10YR5/2・4/2)である。

S B 03 調査1区X70:Y86.5周辺。桁行き4間(7m)×梁行き3間(5.1m)の東西棟の建物で、床面積は35.7m²、N-17°-Wである。柱間は、桁行きも梁行きも1.7m前後とほぼ等間隔である。柱穴は円形、楕円形、隅丸方形を呈するが長軸(直径)が70cm～100cmを測る大きな扇形である。いずれの穴からも柱痕は確認できなかった。柱穴の深さは一定ではないが側柱は40cm前後を測る。柱穴の覆土は灰褐色粘質土(10YR4/2)である。堀方が他の建物の比べ大きく深いこと、柱痕を確認できなかったことから、柱材を抜き取った可能性があると考えられる。また、柱穴P2は検出できなかった。

S B 04 調査1区X70.5:Y86.5周辺。桁行き5間(8.4m)×梁行き3間(5.5m)の東西棟の建物で、床面積は46.2m²、N-17°-Wである。柱間は、桁行きでは1.6～2mと等間隔ではないが、梁行きでは約1.8mを測る。柱穴は円形、楕円形を呈するが長軸(直径)は50cm～70cmを測る。いずれの穴からも柱痕は確認できなかった。柱穴の深さは一定ではないが側柱は40cm～70cmを

測る。柱穴の覆土は灰横褐色粘質土(10YR4/2)である。堀方が比較的大きく深いこと、柱痕を確認できなかったことから、SB03と同様柱材を抜き取った可能性があると考えられる。また、今回確認した建物で床面積が最も大きな建物である。SB05・06と切り合うが新旧関係は確認できない。

S B 0 5 調査1区X70.5 : Y86.5周辺。桁行き3間(4.5m)×梁行き2間(3.2m)の東西棟の建物で、床面積は14.4m²、N-19°-Wである。梁行きの柱間は1.6m、桁行きでは隅柱しか確認していない。柱穴は直徑50cm前後の円形を呈し、深さは一定ではないが約30~40cmを測る。柱穴の覆土は灰横褐色粘質土(10YR4/2)である。この建物はSB03内に含まる。

S B 0 6 SB05と切りあう。SB04の内にある。

S B 0 7 調査1区X71 : Y86周辺。桁行き2間(3.6m)×梁行き2間(3.4m)の南北棟の総柱建物で、床面積は12.24m²、N-8°-Wである。柱間は、桁行きでは1.6mと2mと等間隔ではなく、また梁行きは1.6mと1.8mを測る。柱穴は70cm前後の円形を呈する。柱穴の深さは約30~40cmを測る。柱穴の覆土は褐灰色粘質土(10YR4/1)または灰横褐色粘質土(10YR4/2)である。なお、堀方が他の建物の比べ大きく深いこと、柱痕を確認できなかったことから、柱材を抜き取った可能性があると考えられる。

S B 0 8 調査1区X71 : Y86.5周辺。2間(5m)×1間以上(2m以上)のN-8°-Wの建物である。建物が調査区外に延びているため、その規模は確認できない。柱間は2間側で1.8m、また1間側では2mを測る。直徑30cm前後の円形である。柱穴の深さは一定ではないが側柱は約30~40cmを測る。柱穴の覆土は灰横褐色粘質土(10YR4/2)である。

S B 0 9 調査1区X71.2 : Y86.4周辺。桁行き2間(3.9m)×梁行き2間(3.8m)の東西棟の建物で、床面積は14.82m²、N-30°-Wである。柱間は、桁行き、梁行きとも1.9m前後と等間隔である。柱穴は直徑30~50cm前後の円形を呈する。柱穴の深さは一定ではないが側柱は約30~40cmを測る。柱穴の覆土は褐灰色粘質土(10YR4/1)である。

S B 1 0 調査1区X71.5 : Y86.5周辺。3間(4.2m)×2間以上(4m以上)のN-25°-Wの建物である。建物が調査区外に延びているため、その規模は確認できない。3間側の柱間はで1.2m~1.6mと等間隔ではない。また2間側では1.5m。直徑30cm前後の円形である。柱穴の深さは一定ではないが側柱は約30~40cmを測る。柱穴の覆土は灰横褐色粘質土(10YR4/2)である。

S B 1 1 調査1区X68.3 : Y86.5周辺。桁行き2間(3.8m)×梁行き2間(3.6m)の南北棟の総柱建物で、床面積は13.68m²、N-41°-Wである。柱間は、桁行き、梁行きともでは1.8mと等間隔である。柱穴は直徑70cm~100cmの円形を呈し、柱穴の深さは約30~40cmを測る。堀方が大きいのに比べ深さは浅い。柱穴の覆土は褐灰色粘質土(10YR4/1)または灰横褐色粘質土(10YR4/2)である。

S B 1 2 調査1区X68.3 : Y86.3周辺。桁行き2間(3.6m)×梁行き2間(3.2m)の南北棟の総柱建物で、床面積は11.52m²、N-43°-Wである。柱間は、桁行き、梁行きともでは約1.7mである。柱穴は直徑50cmの円形を呈し、柱穴の深さは約30~40cmを測る。柱穴の覆土は褐灰色粘質土(10YR4/1)または灰横褐色粘質土(10YR4/2)である。

S B 1 3 調査1区X68 : Y86.7周辺。桁行き3間(4.3m)×梁行き2間(3.4m)の東西棟の建物で、床面積は14.62m²、N-41°-Eである。柱間は、桁行きは約1.4m、梁行きは1.7mといず

れも等間隔である。柱穴は直径60cm前後の円形を呈し、深さは約20～30cmを測る。柱穴の覆土は褐灰色粘質土(10YR 4/1)または灰横褐色粘質土(10YR4/2)である。

S B 1 4 調査1区X68.9：Y86.4周辺。桁行き4間(4.3m)×梁行き2間(3.6m)の南北棟の建物で、床面積は15.48m²、N-38°-Wである。柱間は、桁行きでは1.4m前後とほぼ等間隔で、また梁行きでは桁行きの柱間より広く1.8mを測る。柱穴は直径50cm前後の円形を呈する。柱穴の深さは一定ではないが側柱は約20～40cmを測る。柱穴の覆土は褐灰色粘質土(10YR 4/1)または灰横褐色粘質土(10YR4/2)である。

S B 1 5 調査1区X68.9：Y86.4周辺。桁行き4間(約6m)×梁行き2間(約5m)の南北棟の建物で、床面積は約30m²、N-28°-Wである。柱間は、桁行きは2mとほぼ等間隔で、梁行きは1.6mを測る。柱穴は直径40cm前後の円形を呈する。柱穴の深さは約10～20cmと浅い。柱穴の覆土は褐灰色粘質土(10YR 4/1)または灰横褐色粘質土(10YR4/2)である。南側の桁行きと梁行きは垂直でないため、建物の平面形は方形を呈しないが建物とした。

S B 1 6 調査1区X68：Y86周辺。桁行き2間(4m)×梁行き1間(2.3m)の南北棟の建物で、床面積は9.2m²、N-40°-Wである。柱間は、桁行きは2mで、梁行き2.3mを測る。柱穴は直径30cm前後の円形を呈する。柱穴の深さは約20cm前後を測る。柱穴の覆土は褐灰色粘質土(10YR 4/1)または灰横褐色粘質土(10YR4/2)である。

S B 1 7 調査3区X75：Y85.5周辺。桁行き3間(6.9m)×梁行き2間(4.7m)の南北棟の建物で、床面積は32.43m²、N-5°-Eである。柱間は、桁行き、梁行きもの2.3m前後と等間隔である。柱穴は直径50cm～70cmの円形を呈する。その内柱痕を確認できた穴はP 1～P 8で、その大きさ直径20cmであった。柱穴の深さは一定ではないが側柱は約30～40cmを測る。柱穴の覆土は褐灰色粘質土(10YR 4/1)または灰横褐色粘質土(10YR4/2)である。また、P 3、P 4の東側で穴を検出、附属的な穴とした。なお、S B 1 8を切り合う。

S B 1 8 調査3区X75：Y85.5周辺。桁行き3間(5.9m)×梁行き2間(3.9m)の南北棟の建物で、床面積は23.01m²、N-35°-Eである。柱間は、桁行き、梁行きも2.3m前後と等間隔である。柱穴は直径50cm～70cmの円形を呈する。その内柱痕を確認できた穴はP 1～P 8で、その大きさ直径20cmであった。柱穴の深さは一定ではないが側柱は約30～40cmを測る。柱穴の覆土は褐灰色粘質土(10YR 4/1)または灰横褐色粘質土(10YR4/2)である。

井戸(S E 0 1) 調査2区X73.5：Y86.0周辺。壠方は長軸3m短軸1.8m以上の楕円形、深さは1.8m、最下層は拳程の川原石が引き詰められていた。その内からは、周辺からの水が入らないようのこと、壠方の土が崩壊するのを防ぐための井戸枠が出土した。枠は一枚が縦25cm横120cm厚み5cmのスギ材を7段に組み上げたものである。1面3面は7段、2面4面は6段である。

溝 調査3区 調査を東西に流れた溝。2条の溝が切り合いながら存在する。

道状遺構 調査1・2区 道の側溝と考えられる遺構を所々で検出したが、以前の発掘調査で確認されたような明瞭なのではなかった。

C 遺物

遺構内出土遺物(1～22)

S B 17出土(1) 蓋受けをもつ杯身で、受け部を含む径は13cmである。口縁部内外面はロク

ロナデで調整する。柱穴P 6 の覆土の中から出土したが、建物の年代とは異なる。

S K 01出土(2・3) 口径12.5cm、高さ3.7cm、底部外面はヘラ切り後ナデ、その他はロクロナデを施す杯A(2)と平底をもつ鉢(3)である。

S E 01出土(4~7) 杯A・Bである。4は口径12.5cm、高さ3.7cmの平坦な底部をもつ杯A、5は口径12cm、高さ15cmの高台をもつ杯B、6・7は底部に糸切り痕を残す杯A。6・7は井戸底の礫敷上面から出土した。

S D 01出土(2~22) 杯A(8~10、21) 8は蓋受けをもつもの、9・10・21は高さが2.5~3cmと器高が低く体部が外へ開くものの。杯B(11~16) 11・12は直径が10cm前後の広い底部に器高3.5cm前後と低い体部をもつ。14~16は直径7cm前後の底部に器高4.5cmの体部をもつもの。17・18は扁平なつまみが付く杯蓋で17は径が12.3cm口縁端部は下方する。18は径が15.4cm口縁端部は丸くなれる。19は高坏の脚部、20は瓶の頸部、21は双耳瓶、22は壺であるが小破片のためその全容は不明である。

包含層出土遺物(24~82)

杯A(24~30) 24は蓋受けをもつ杯身で、受け部を含む径は13cm、器高は3cm。25~28は口径が11.5cm、12.5~13cm、14cm、器高は3~4cm。29・30は皿状。

杯B(31~43) 31は底部と体部は明瞭である。39~43は器高が高く椀状の杯である。高台の形状から大小の杯があるが、その全容は不明である。

杯蓋(44~59) 44~51は内面端部にかえりをもつ蓋、52~59は口縁端部を下方へつまみ出すもの、まるごめるもので、いずれもロクロナデで仕上げる。

壺蓋(60) 口径10cm、器高4cm、大上部は丸く口縁端部は垂直に下る。

61は壺。62は壺の頸部。63~66は横瓶の頸部。67は高坏の脚部。

75は口縁部が外反し端部を上方につまみ上げ、頸部には櫛描きによる波状文を施す。77は口縁部がね外反し、その端部は「く」の字に折れる。頸部には斜状の沈線を施す。79は珠洲の壺。垂直な体部に折り返した

80~82は青磁である。81は椭口縁部で内外面に文様を施す。

第Ⅳ章　まとめ

1. 本書では、桜町遺跡産出地区の発掘調査で検出した奈良・平安時代の遺構や遺物について報告したものである。
2. 今回検出した遺構は、掘立柱建物 18 棟、井戸、土坑、溝、道路遺構である。このうち堀立柱建物と井戸については以下に改めて記す。
3. 掘立柱建物のうち、検出状態が良好であった 13 棟について遺構平面図および断面図を掲載し、残りについては縮小版(1/100)の平面図のみ掲載した。
4. 井戸は、堀方が長軸 6m、短軸 5m の梢円形を呈しており、その内側には方形の井戸枠が設置されている。枠材は縦 25cm・横 120cm で厚さは 5cm に成形され、使用樹種はスギであった。取り上げ後は保存処理を行った。
5. 土坑や溝については、規模や形状は様々であるため、その性格などは不明であるが、検出面から時期は掘立柱建物等と同時期に属すると考えられる。
6. 道路遺構は、今回の調査地の南側に隣接する調査地において、昭和 62 年度および平成 5 年度の調査においても検出していた。しかしながら、道の側溝と考えられる遺構を所々で検出したもので、幅は 5m を計る。時期について遺物が伴っていないため奈良時代か平安時代かの明確な時期決定はできない。
7. 今回出土した遺物は、須恵器、土師器、珠洲、青磁である。大半は包含層からの出土であった。時期は遺構と同じく、奈良時代、平安時代に属する。
8. 遺構詳細

A 堀立柱建物

掘立柱建物は 18 棟確認した。掘立柱建物の規模、床面積、方位(真北に対しての振れ)、柱穴からの出土遺物、他の建物との切り合い等から、今回確認した掘立柱建物の性格を判断したい。

建物の規模は、2間×1間が 1 棟、2間×2間で 4 棟(内 3 棟は総柱建物)、3間×2間が 5 棟、4間×2間が 2 棟、4間×3間が 1 棟、5間×3間が 1 棟。床面積では、最小が SB 16 で 9.2m²、最大は SB 4 で 46.2m²を測るが、11～15m²が 7 棟、18～23m²が 2 棟、30～35m²が 3 棟である。建物の一部が調査区外へ延びるなどその全容が確認できないものは 4 棟である。

南北方向(長軸)から、南北棟が 10 棟、東西棟は 5 棟、不明は 3 棟。真北に対しての振れ方位であるが、N-W が 13 棟で、8°が 1 棟、18°前後が 4 棟、25°～30°が 4 棟、38°～43°が 4 棟、N-E は 3 棟あるがばらつく。

柱穴からは、埋設部分であったことにより腐食せず残存したと考えられる柱材の一部や数点の土器破片が出土した。しかし時期を決定するものとはなりえなかった。しかし包含層からは飛鳥時代～奈良時代に比定できる須恵器の雜器類が多く出土した。

今回の調査区の南側にあたる現国道 8 号小矢部バイパス直下においても、同バイパス建設に先行して昭和 59 年度に発掘調査を実施し、41 棟の掘立柱建物を確認している。前回の掘立柱建物のあり方やその配置、出土遺物からみて大差がなくむしろ類似が多い。したがって今回の調査

で確認した掘立柱建物は前回の集落の一部にあたると考えられる。

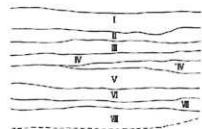
今回のものと合わせると 59 栋もの掘立柱建物を確認したこととなる。調査区の北西 700 m にある丘陵の北側斜面には横穴墓が構築されているが、掘立柱建物群は横穴墓を墓域とする人々の集落であり、奈良時代以降も集落として形成した地域と考察している。今回確認した掘立柱建物はその集落の北端部に位置する。

B 井戸 (SE01)

井戸枠は、積み上げ式横板組型相欠き口型である。縦 25cm、横 120cm、5 cm 前後の厚みのある板を、互い違いにして積み上げていくもので、横板端部の上下に「コ」の字状に仕口を施す 1 面（北側）と 3 面（南側）は 7 段、2 面（東側）と 4 面（西側）は 6 段である。井戸の最下層には浄水を行うための疊敷となっているが、その疊を除去したところの土質は粘質土であり、水が湧き出る様相ではない。また、井戸枠はしっかりとおり周囲から水が入るようなものでない。このことから、往時、井戸としての機能を果たしていたか疑問を残す。最下層の疊敷上面から出土した須恵器から 8 世紀後半～9 世紀初頭に属すると考えられる。

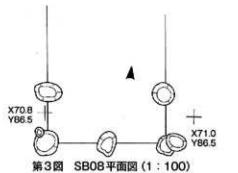
参考文献

- 小矢部市史編纂委員会編 1971 「小矢部市史」
- 富山県教育委員会 1972 「富山県遺跡地図—埋蔵文化財包蔵地地図」
- 小矢部市教育委員会・小矢部市埋蔵文化財分布調査団 1980A 「小矢部市埋蔵文化財分布調査概報 1987 年度」
- 小矢部市教育委員会 2003 「富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書 幌生・古墳・古代・中世編」
- 宇野隆夫 1982 「井戸考」『史料第 65 卷第 5 号』史学研究会

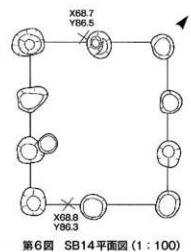


基本土層模式図(1:20)

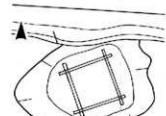
- I 表土
 II 褐灰色砂质土 (10YR 5/1)
 III 黄褐色砂质土 (10YR 5/6)
 IV 黄褐色沙质土 (10YR 4/1)
 V 褐灰色砂质土 (10YR 4/1) 铁分含む
 VI 黄褐色粘质土 (10YR 3/1)
 VII 褐灰色粘质土 (10YR 5/1) 铁分含む
 VIII 黄褐色粘土 (10YR 6/1)
 IX 黄褐色粘土 (10YR 5/6)



第3図 SB08平面図(1:100)



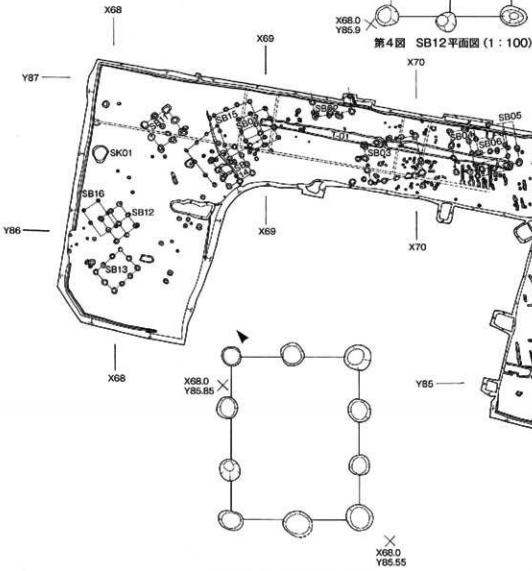
第6図 SB14平面図(1:100)



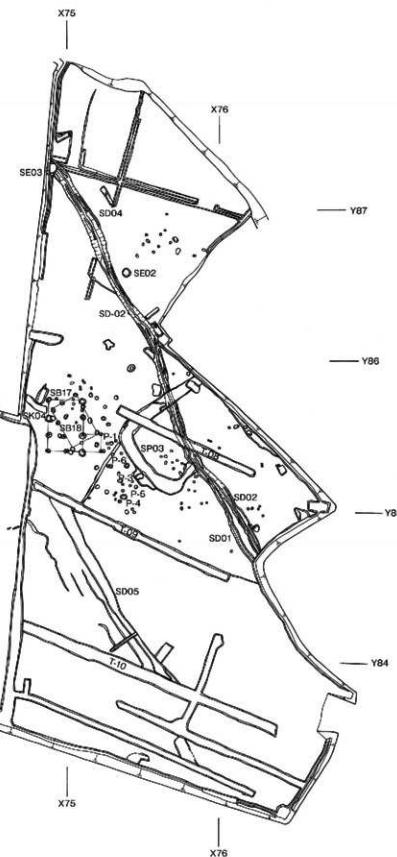
第7-1図 SE01平面図(1:80)



第7-2図 SE01断面図(1:80)

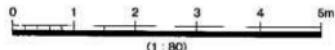
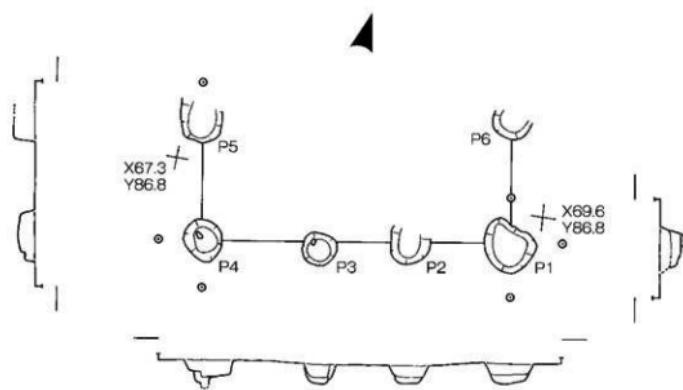
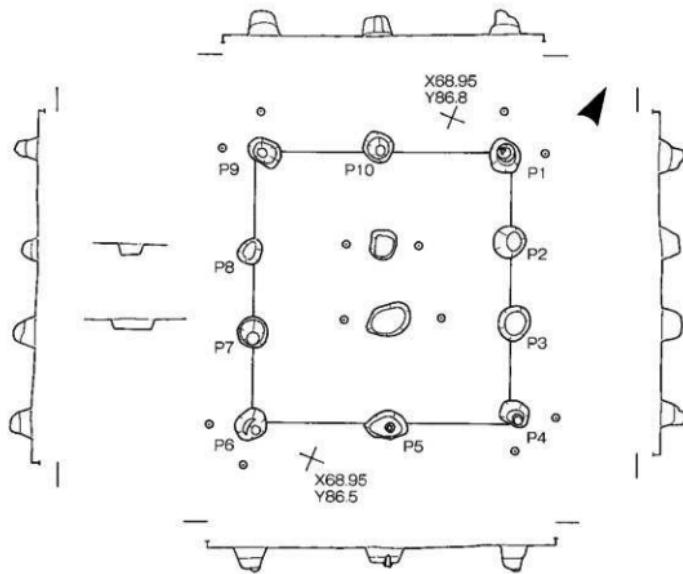


第5図 SB13平面図(1:100)

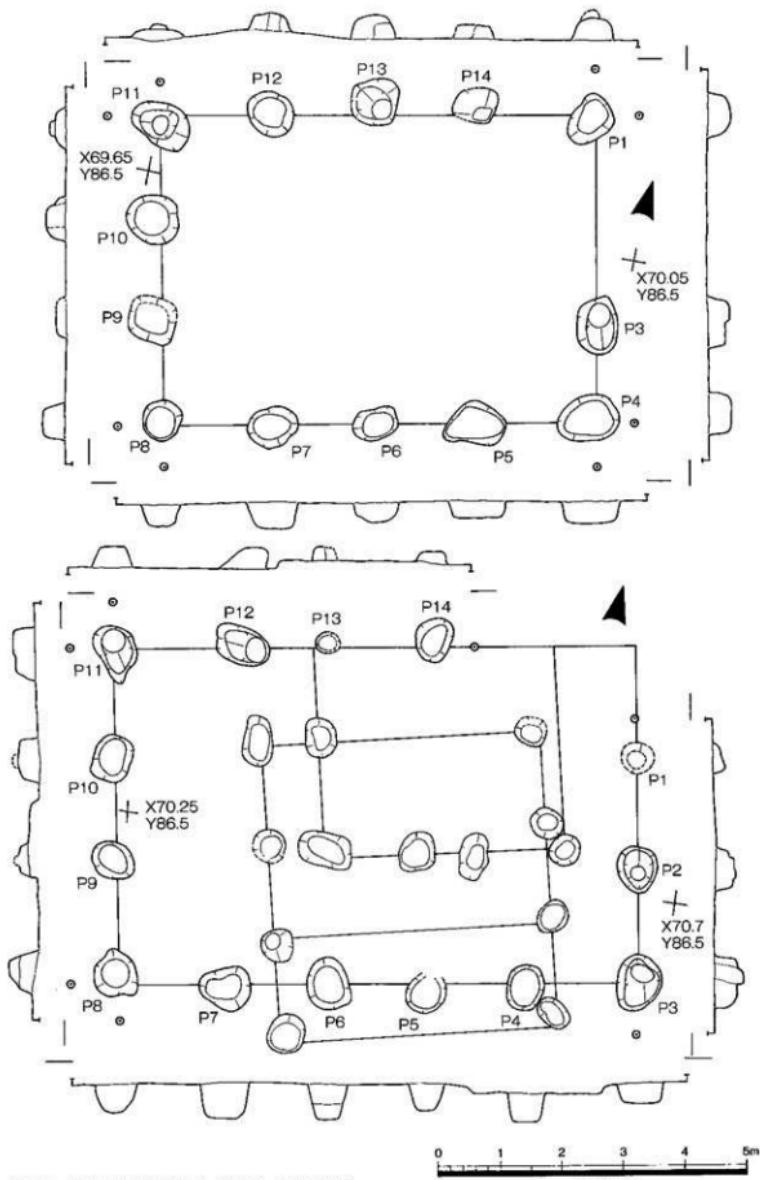


第8図 調査区遺構平面図(1:500)

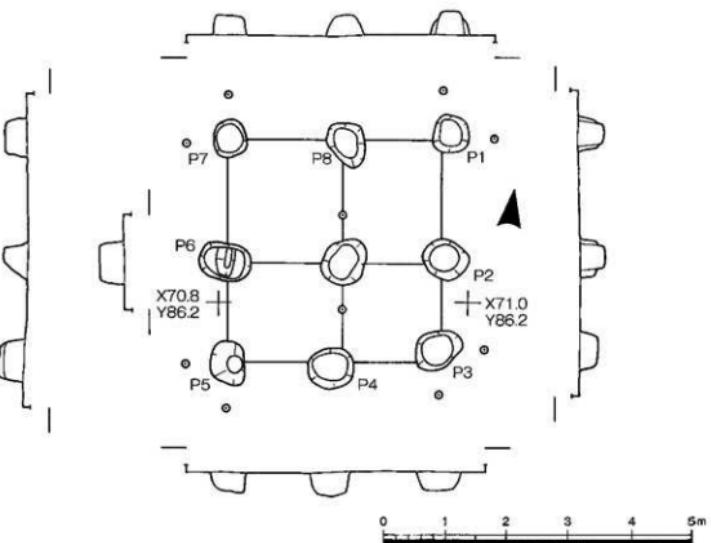
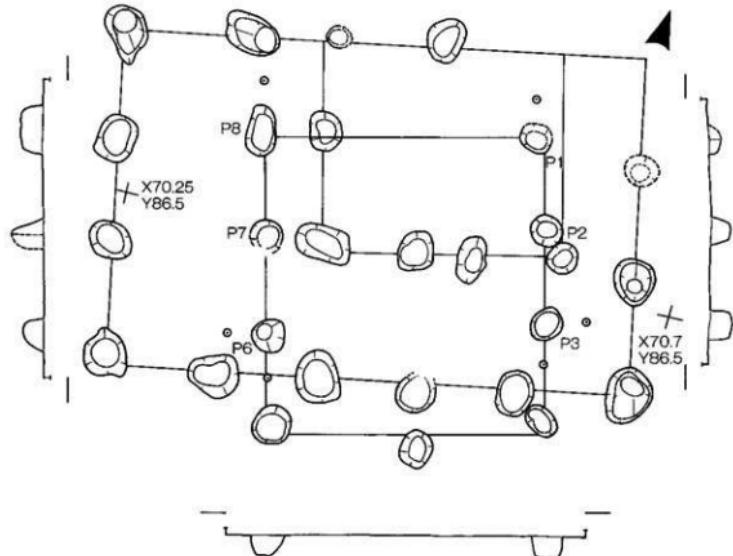
A horizontal scale bar representing distance. It features numerical markings at 0, 10, 20, 30, 40, and 50 meters. Below the scale bar, the text '(1:500)' indicates the scale factor.



第9図 造構 堀立柱建物 (上:SB01, 下:SB02)

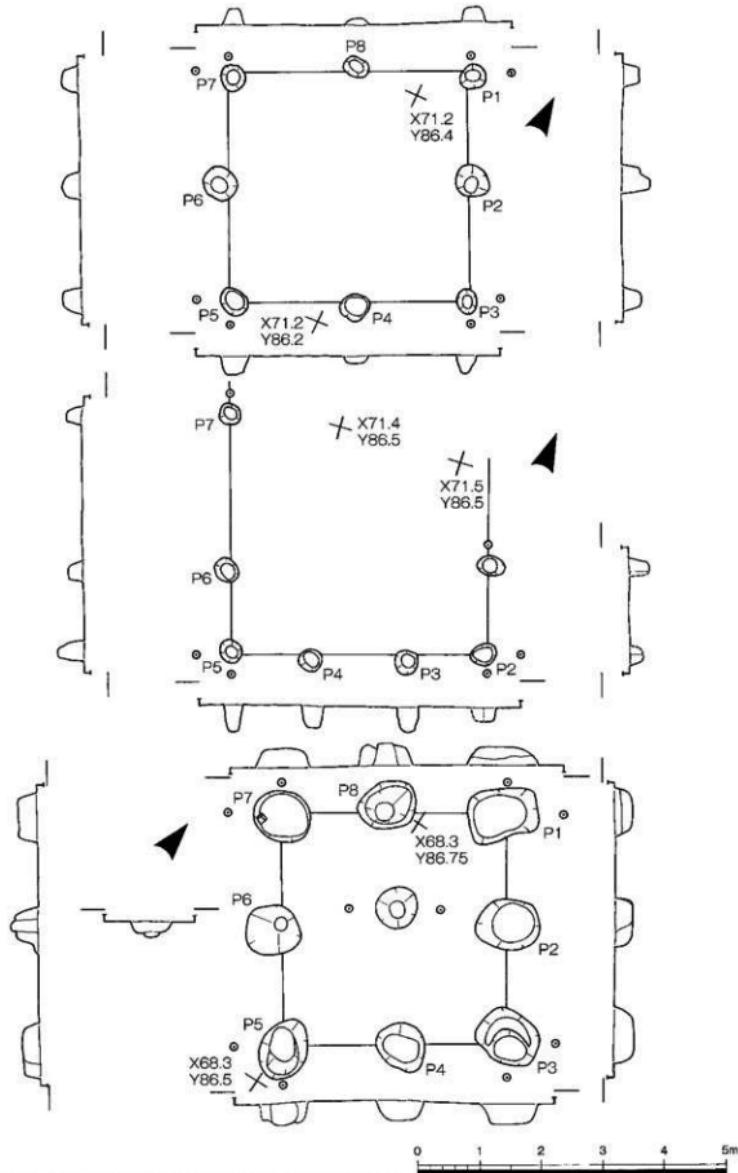


第10図 遺構 堀立柱建物（上：SB03、下：SB04）



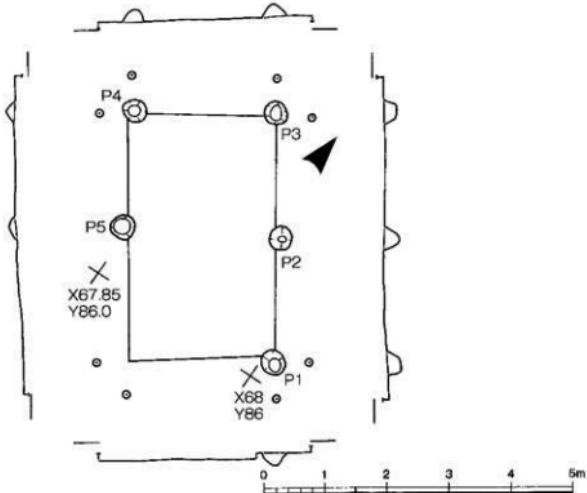
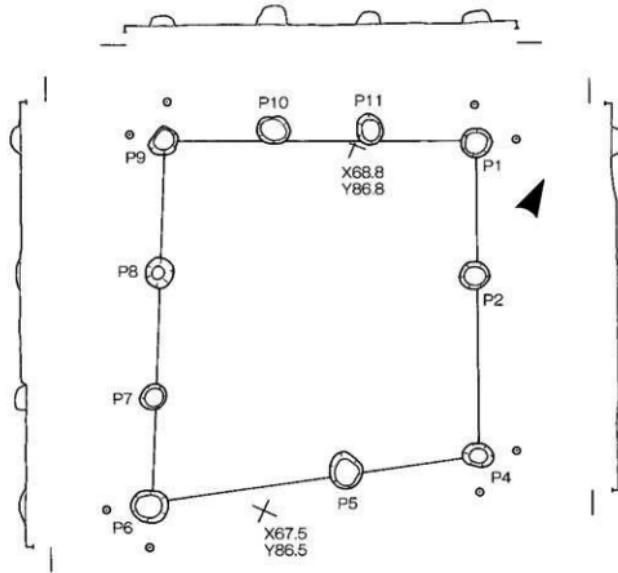
第11図 造構 埋立柱建物（上：SB05、下：SB07）

0 1 2 3 4 5m
(1:80)



第12図 造構 堀立柱建物（上：SB09、中：SB10、下：SB11）

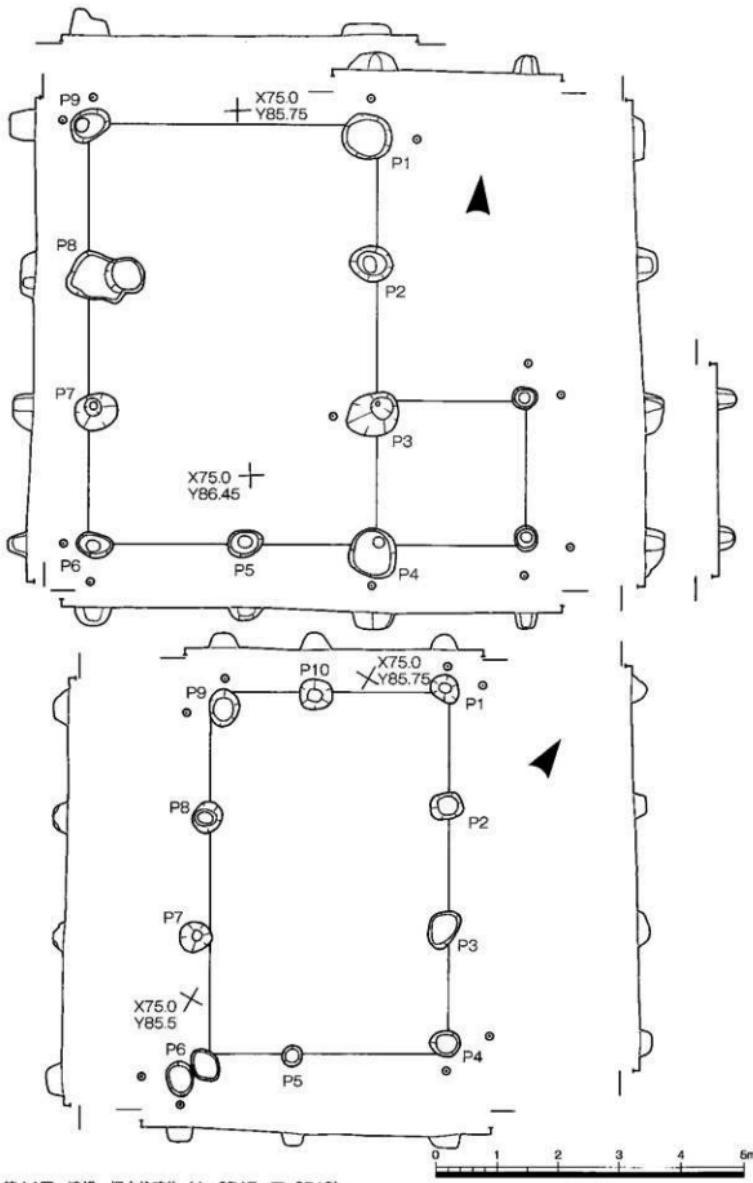
(1 : 80)



第13図 造橋 堀立柱建物（上：SB15、下：SB16）

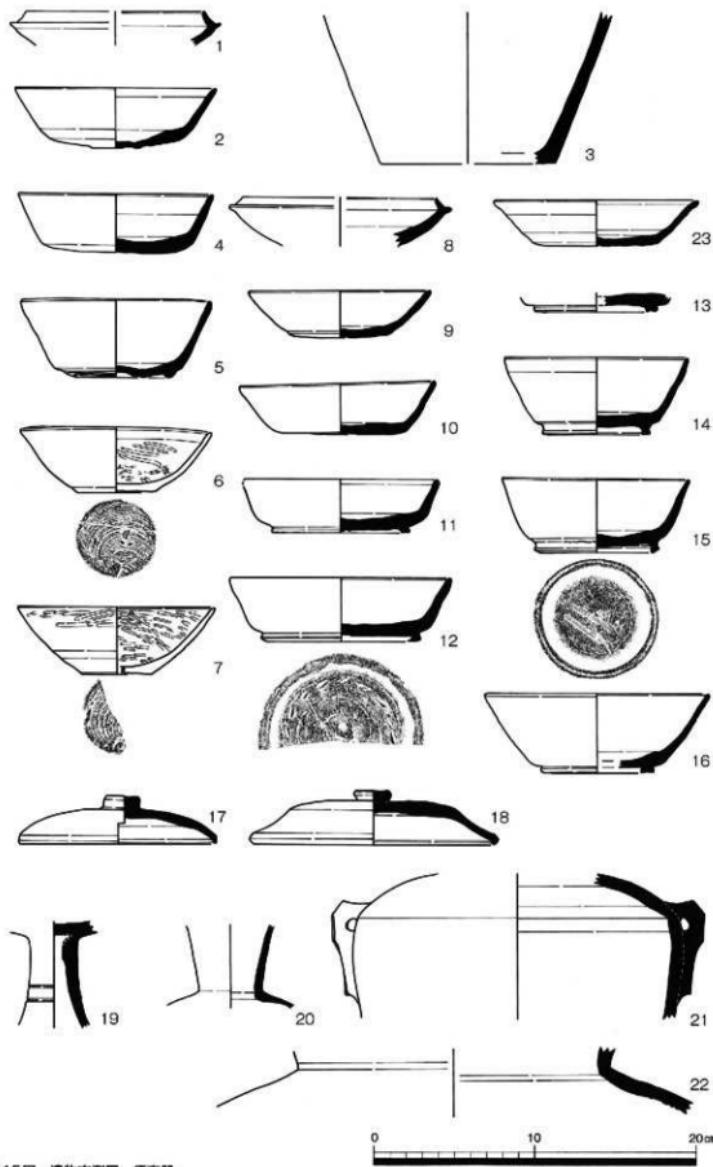
(1:80)

0 1 2 3 4 5m

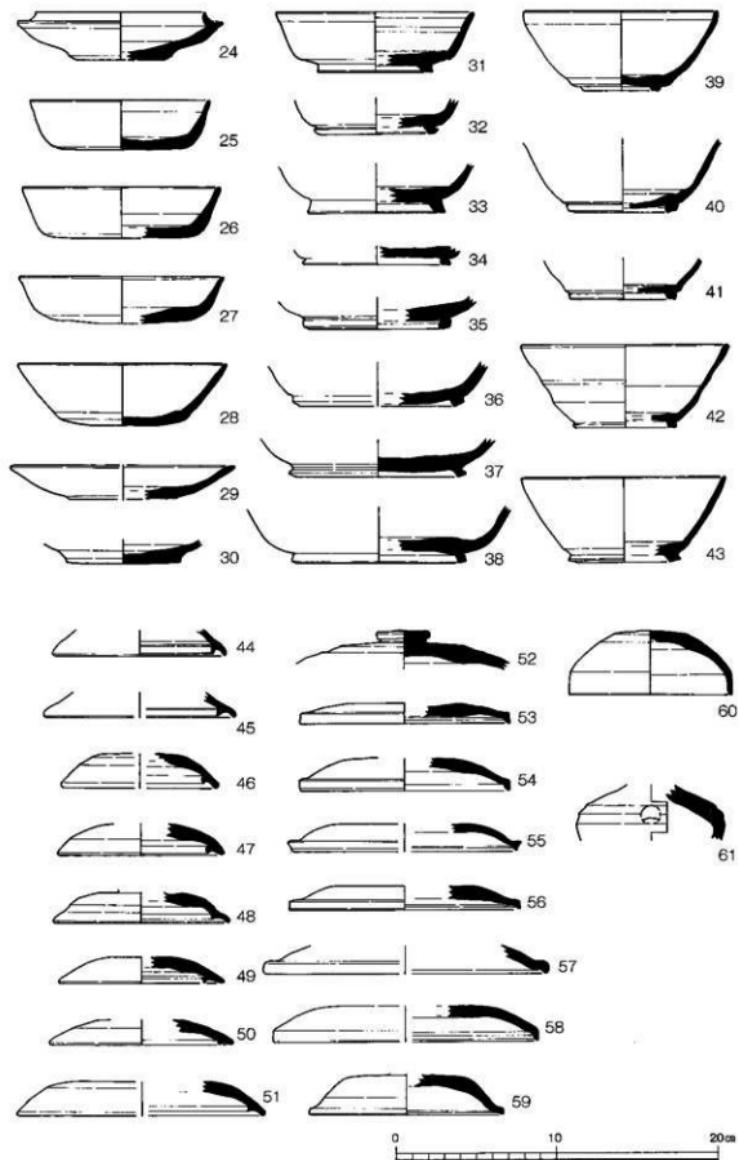


第14図 造構 堀立柱建物 (上:SB17, 下:SB18)

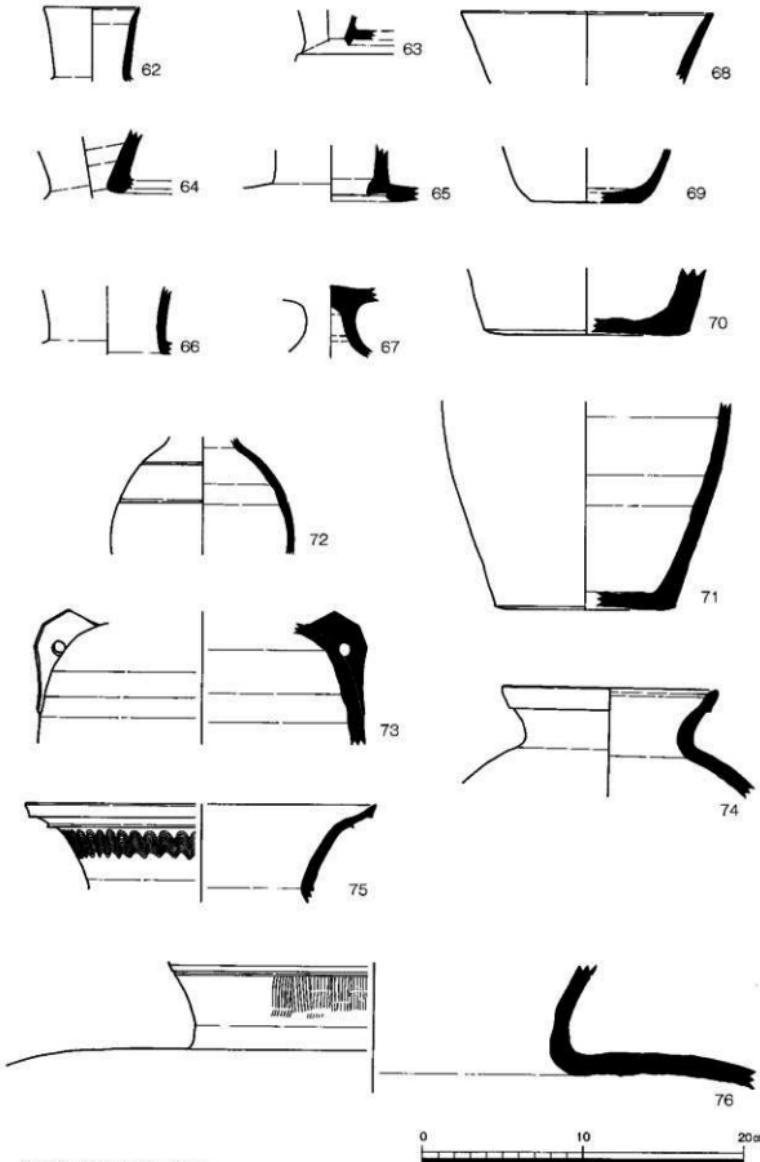
(1 : 80)



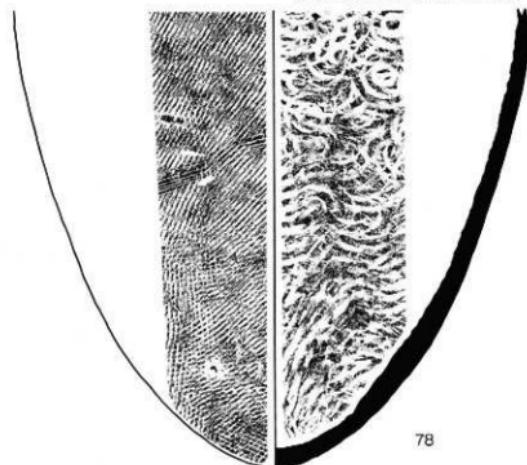
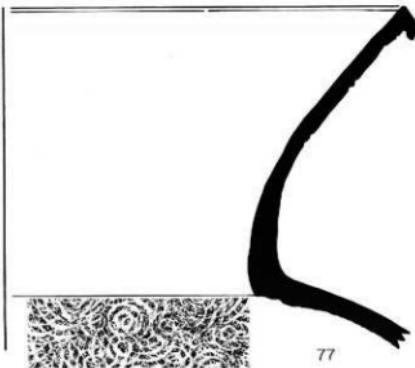
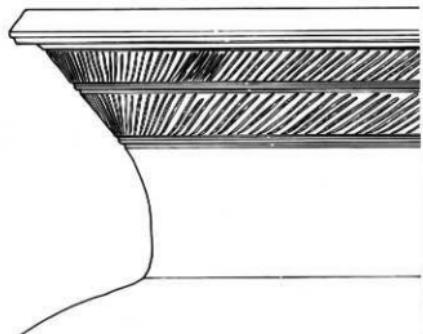
第15図 遺物実測図 須恵器



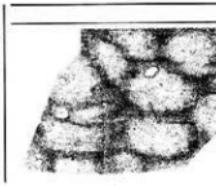
第16図 遺物実測図 須恵器



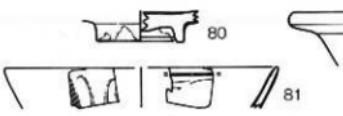
第17図 遺物実測図 穀穂器



78



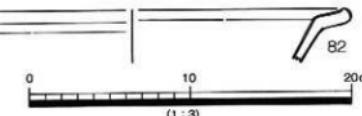
79



80



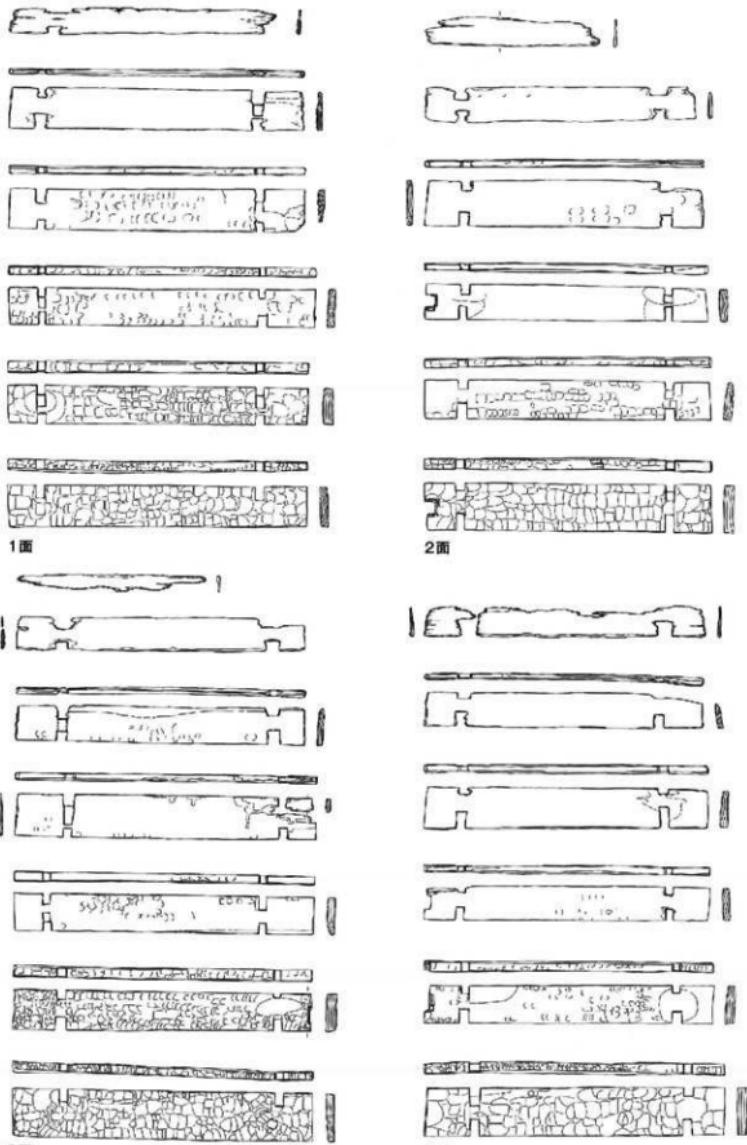
81



82

0 10 20cm
(1 : 3)

第18図 遺物実測図 須恵器、珠洲、白磁、青磁



第19図 SEO1 井戸枠板実測図

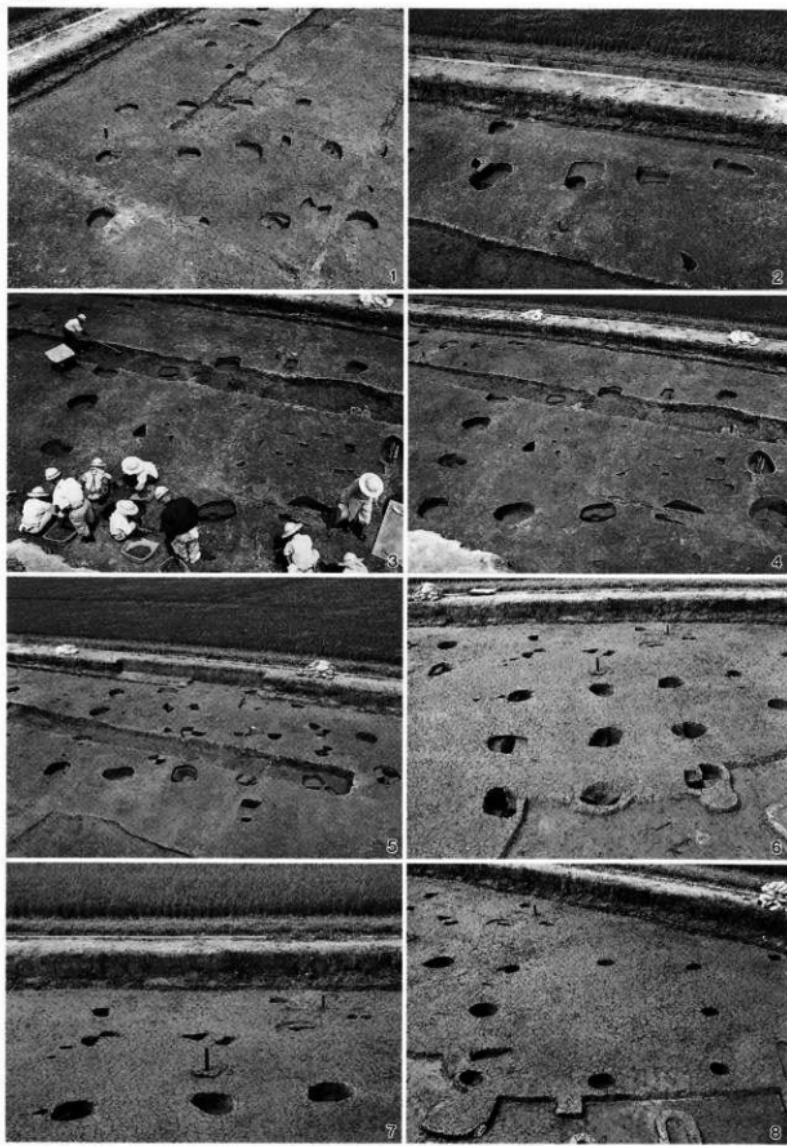


図版 1



上：第1・2調査区全景 下：第3調査区全景

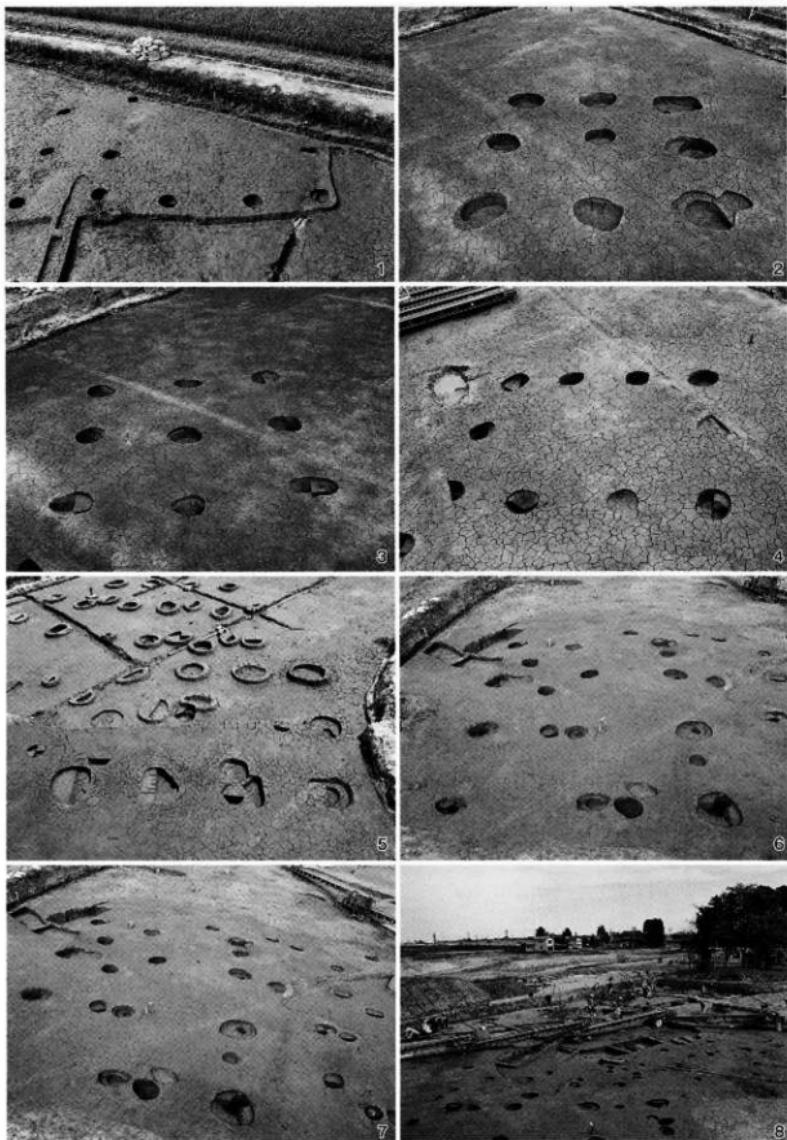
図版 2



1 SB01(南から) 2 SB02(南から) 3 SB03(南から 作業風景) 4 SB03(南から)

5 SB04(南から) 6 SB07(南から) 7 SB08(南から) 8 SB09(南から)

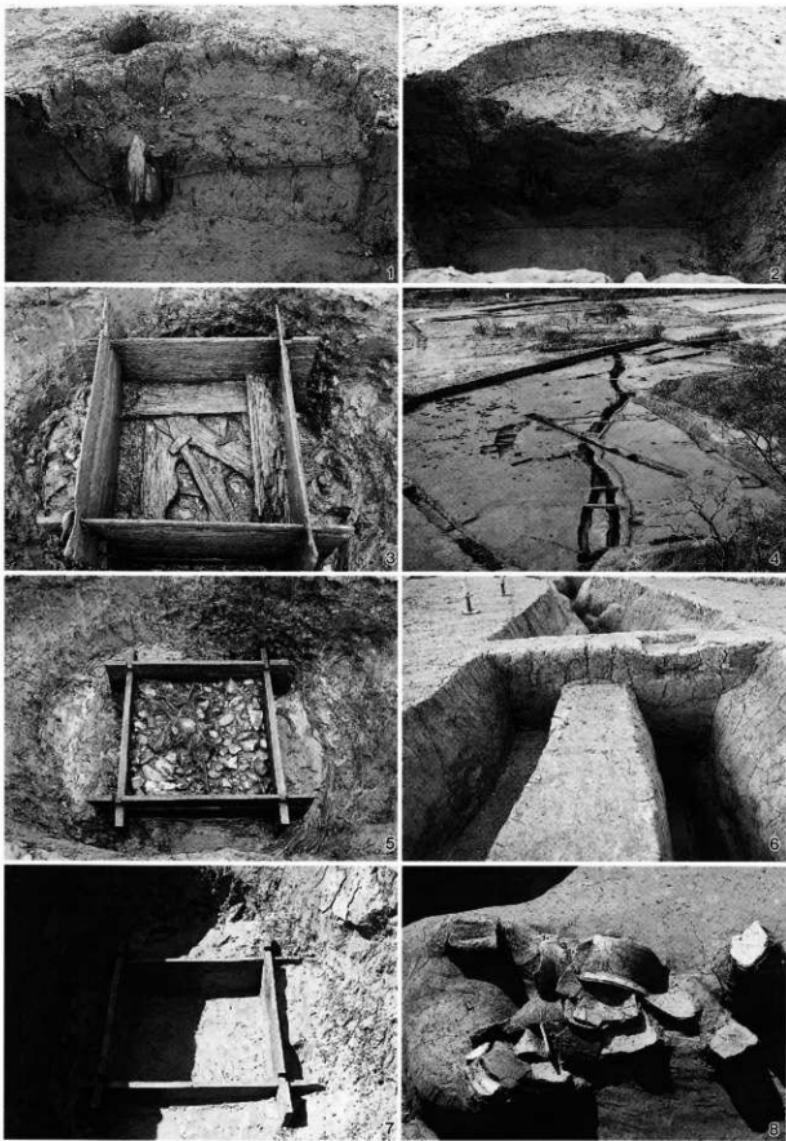
図版 3



1 SB10(南から) 2 SB11(南から) 3 SB12(南から) 4 SB13(東から) 5 SB14(西から)

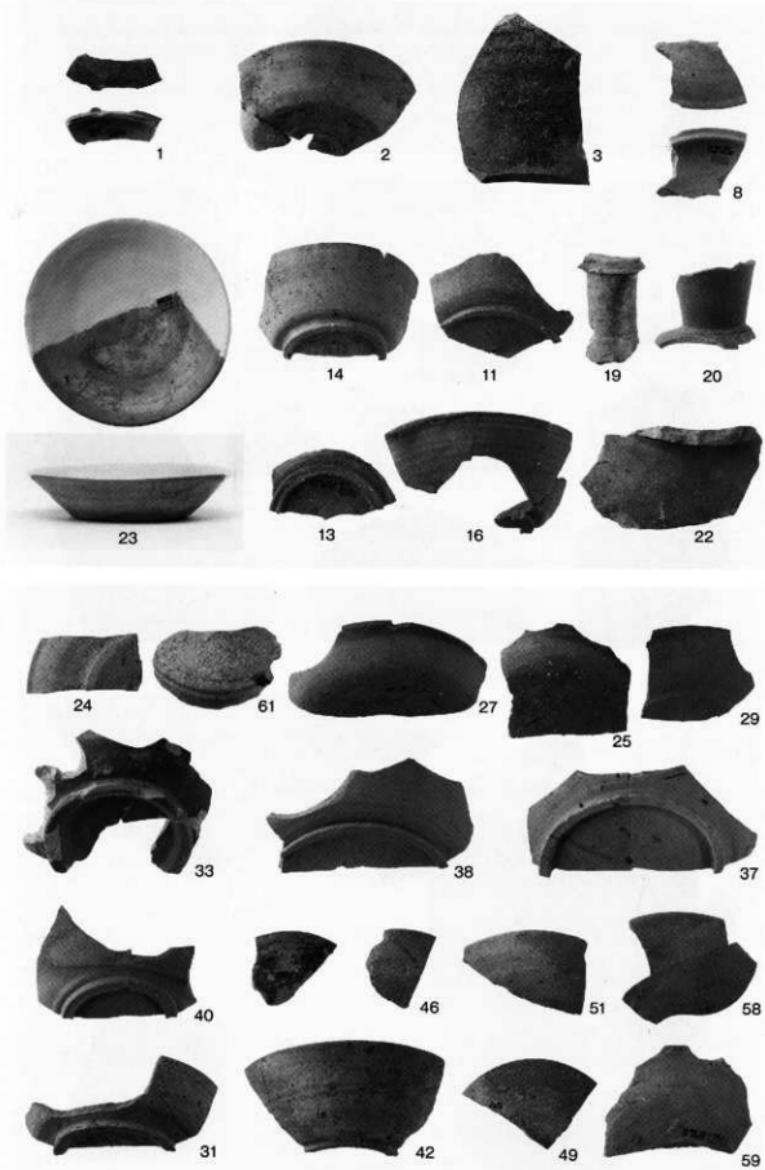
6 SB17(南から) 7 SB18(南から) 8 第3区作業風景

図版 4



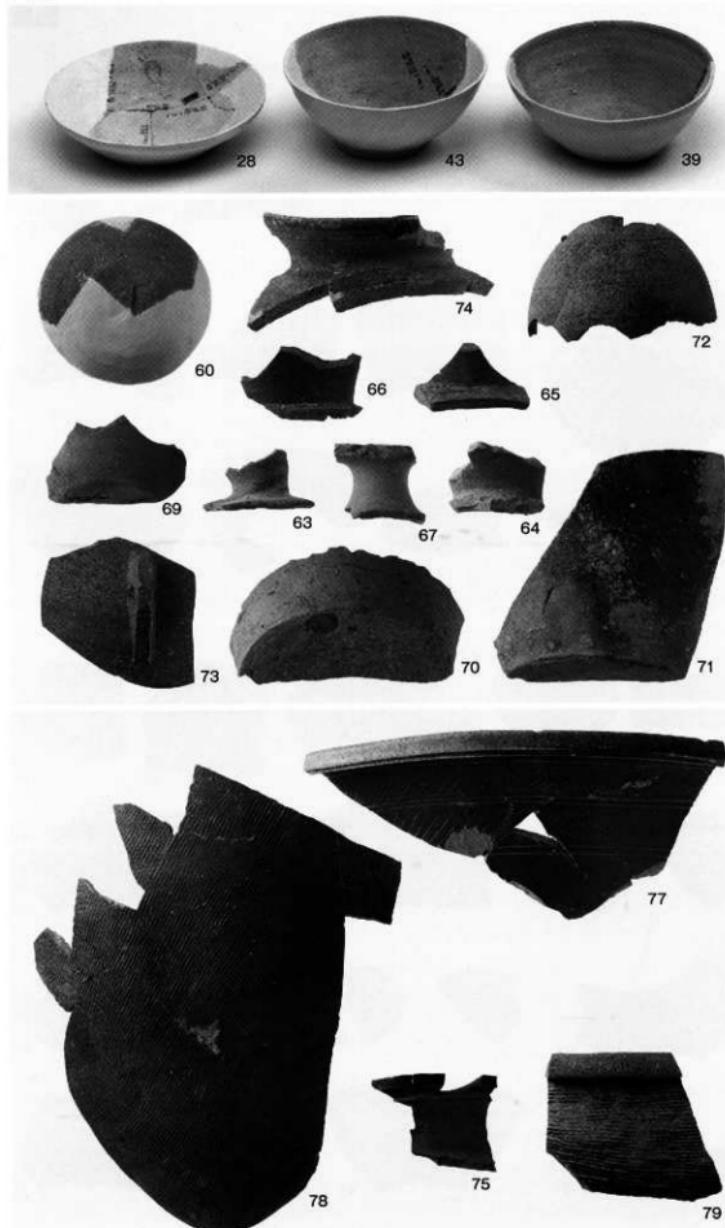
1 SB02P3 2 SB04P2 3 SE01(西から) 4 SE01最下層(西から) 5 SE01の底(西から)
6 SD01(西から) 7 SD01断面 8 SD01出土土器

図版 5



遺物(1)

図版 6



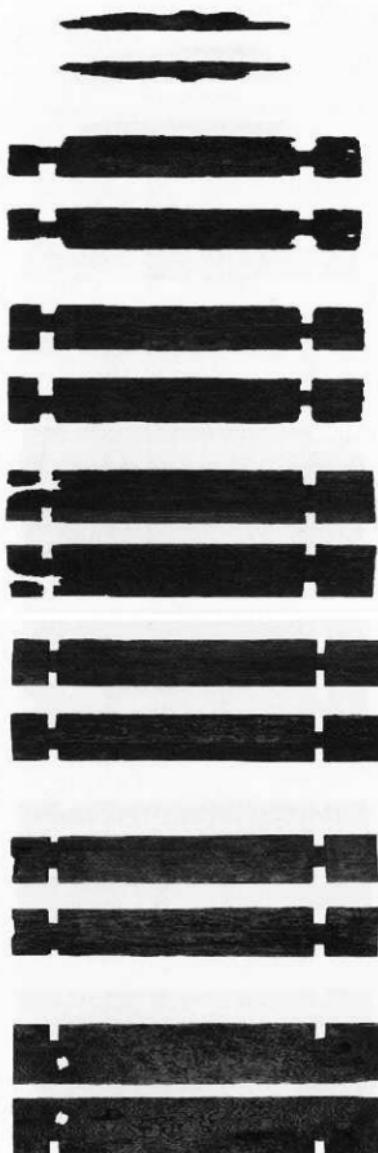


1面

2面

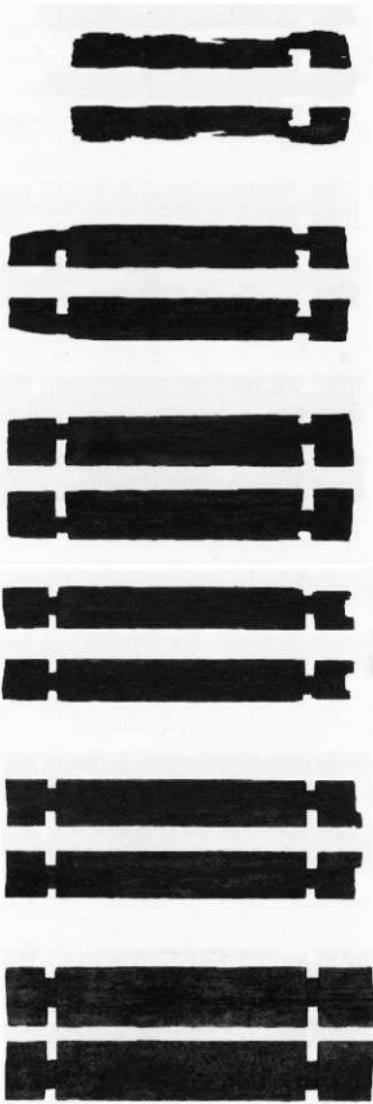
SE01 井戸枠板(1)

図版 8

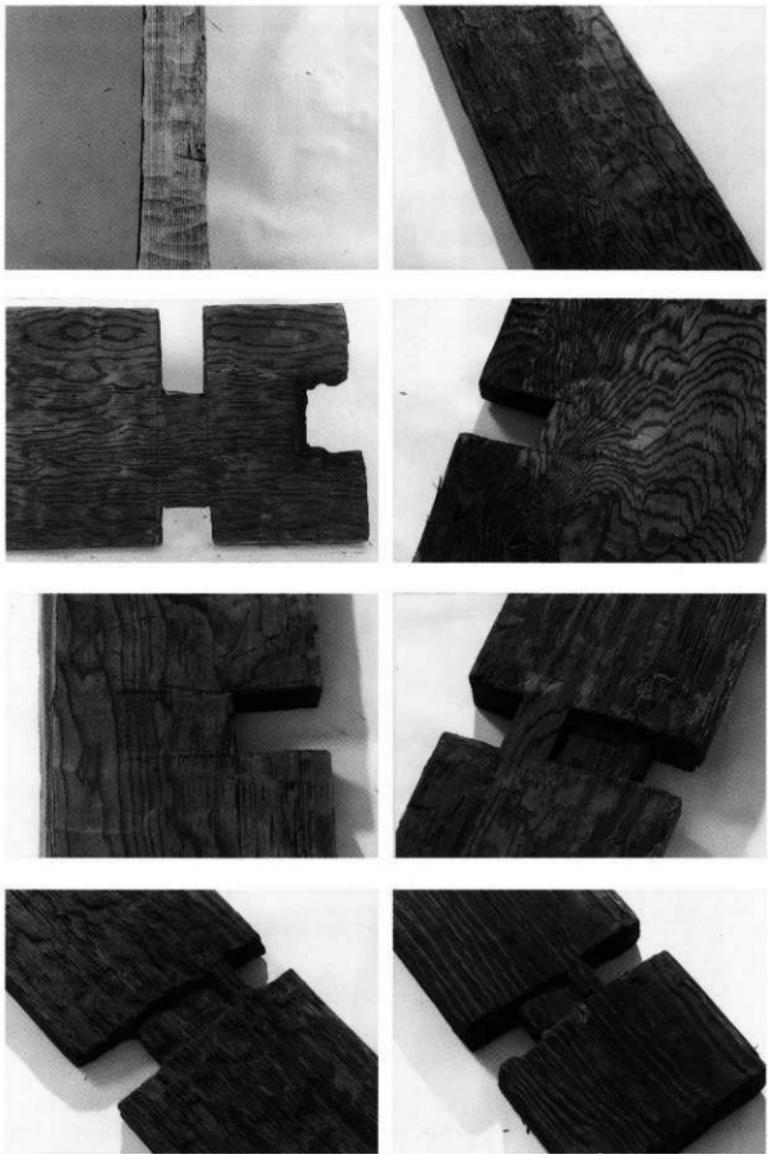


3面

SEO1 井戸枠板 (2)

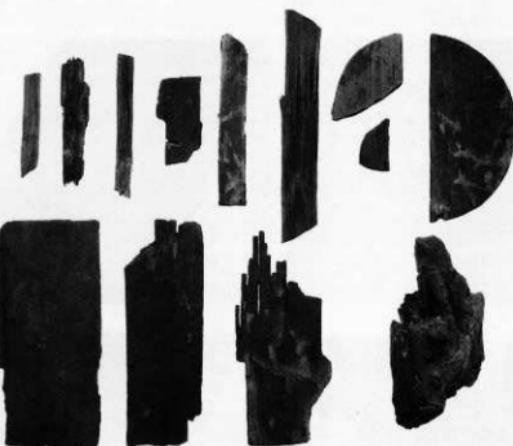


4面



SE01 井戸枠板の相欠き仕口

図版 10



SE01内より出土した木製品



SB02



SB01



SB04



SB04



SB04



SB04

壇立柱建物の柱穴から出土した木柱

小矢部市埋蔵文化財調査報告書第64冊

富山県小矢部市

桜町遺跡発掘調査報告書

—小矢部市道の駅整備事業に伴う埋蔵文化財調査—

発行日 平成21年3月31日

編集・発行 小矢部市教育委員会

〒932-8611 富山県小矢部市本町1番1号

TEL.0766-67-1760

印 刷 株式会社アヤト

